
翔る狐は何処に行く

七夕 赤裳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翔る狐は何処に行く

【Nコード】

N2078C

【作者名】

七夕 赤裳

【あらすじ】

ある事件に巻き込まれ如月翔太は出会ってしまった…出会わなければ彼の人生はフツーでわあったが、平和な生活が約束されていたが、出会ってしまった。『彼ら』に、もし『彼ら』に出会わなければ自らも『彼ら』と同じにはならなかったのに…

サイヤク（前書き）

この小説は獣人など、動物を擬人化したキャラがいっぱいでてきます。

誤字などありましたら、ご報告お願いします。

サイヤク

夏、太陽がさんと降り注ぐ時期、だが今はその太陽も暮れあたりは一面暗闇、民家が回りにまったくない町外れの山の中、部活のせいで帰りがおそくなつてしまい急いで帰路についていた如月翔太は今追われている。

追ってきているそいつは、成人男性の体よりも一回り大きく獣のように体中が黒い獣毛におおわれていて、狼のような姿をしているが人間の骨格をしているそれは、俗に狼男と呼ばれるやつだ。そいつはただの人間なんかよりも容易く捕まえることができるのに、獲物が怯えているのを楽しむかのように近づいたり離れたりを繰り返している。

「なんだよ、あれ！なんで追ってくるんだよ！」

（立ち止まったら、殺される！）

長い間この山に住んでいる翔太は、ワザと巨体の狼男が通りにくい木々が鬱そうとしている道を選び全力で地を駆けている。

だが、狼男はそんなことはお構いなしに木から木へと飛び移りどんどん翔太を追い詰めていく！

そして崖の近くに生えている大木まで来たときだ。

「ハッ、ハッ…もお、だめだ…」

体力の限界を超え近くの大木へ手をつき息をととのえながら狼男の気配をうかがう。

狼男の気配はない… 聞こえるのは自分の荒い息だけだった。

（なんとか、逃げ切ったか…）

安心し、座ろうとしたときだ。

ドッオン！

獲物が安心し、警戒を解いたところを狙い狼男が落ちてきた！

翔太は腰を抜かし、みつともなく尻餅をついたままあかずさりを
するしかできなかった。

「あつ、あつ…」

恐怖でまともにしゃべる事もできない。

翔太の怯えぶりに満足したのか、それともただ追い回すに飽きた
のか翔太にとびかかろうと、姿勢を低くし背骨のバネを使い飛ぼう
とした瞬間！

ドンッ！

腹の底に響く重い音と共に狼男の顔が吹き飛んだ！そのまま顔の
無くなった体は痙攣しながら地面に倒れ、やがてピクリともしなく
なった。

翔太は突然のことに頭が真っ白になってボーっとしてわいるが、
とりあえず助かったことだけは理解した。

サイヤク（後書き）

三人称って難しい^^；

デアイ（前書き）

誤字などがありましたら、ご報告おねがいします。

突然翔太くん視点になってすみません、正直三人称は僕には無理でした（T―T）

デアイ

「大丈夫ですか？」

俺は突然聞こえた声に飛び上がった。目の前に白い眼帯したやつが俺の顔を覗いていた。そいつは俺が普段通っている月宮高校の制服着ていた。誰だコイツ？見たことないぞ、夏なのになんで制服着てるんだ？というかここはどこだ？そいつはもう一回「大丈夫ですか？」と言いながら、手をだしてきた。俺は混乱している頭でその差し出してきた手の意味を考えていると

「一人で起きれますか？」

どうやら、起こすのを手伝ってくれるらしい。俺はお礼をいいながらその手をとった。

「ケガは…ありませんね、いやあ〜それにしても危ないところでしたね！」

そいつは俺の体を見ながらそう言った。危ないところ？なにがだ？俺はまだボーっとしている頭でそんなことを考えていると、今さっきまでの悪夢がフラッシュバック！間拔けな声と共にまた尻餅をついた。

「さっ、さっきのあれは！？」

「ああ、狼男でしたら、ちゃんと仕留めましたよ、だから大丈夫です」

そう言って、頭の無くなった死体を指差した。

死体を中心に大量の血が広がっていた。かなりグロテスクだ…

「起きれますか？」

さつきと同じように手を出してきた。

情けないが、俺はまたお礼いながらその手をとった。

少し頭がクリアーなってきた、色々な疑問がでてきた。

「仕留めましたよってことはお前がやったのか？」

そいつは、平然と「そうですよ」と答えた。

…なんで、こいつはこんなに平然としてられるんだ？そもそもこいつはいつたい何者なんだ？考えれば考えるほどわからなくなる。俺は深呼吸を数回して落ち着いてからから一気にしゃべり始めた。

「お前は誰だ？なんでウチの学校の制服を着てるんだ？あの化け物はいつたい何なんだ！？どうしてお前はあの化け物のことをしているだ！？だいたいなんでそんなに平然としてられるんだ！？」

「そんなにいつきに質問されても答えられません。とりあえずお互い自己紹介しましょう。僕の名前は柴崎 リク、夏休み明けにこちに転校してくるようになってます。あなたの名前は？」

転校生？確かにそれなら見覚えがないことに納得がいく。

「俺の名前は如月 翔太だ。で、あの化け物は何なんだ！？」

「あれは狼男です」

「…じゃあ、なんでお前は、あの狼男について知っている？」

「答えられません、あなたには知る資格がありません」

「なんだと、ふざけんなよ！俺は殺されかけたんだぞ！なのになんであの化け物について知る資格がないだよ！つうか、資格ってなんだよ！？」

俺は激怒した。なんで知るだけなのに資格とか必要なんだよ！おかしいだろ。

「落ち着いてください！わかりました。すこしだけなら教えますか、どうか落ち着いてください」

意外と簡単に折れてくれた…よくマンガやアニメだとこのまま教えてくれないのに…

「いいですか、あの狼男はことは別の世界から来た犯罪者です。で僕はそれを捕まえる正義のヒーローなんです」

「……え？マジで？」

「もちろんウソです」

……結局は教えてくれないのか、なんか今のでもよくなくなっていました。ここまでして教えてくれないってことは、かなりやばいって事なんだろう、きつと

俺が柴崎 リクのウソで脱力していると、『ジリリン、ジリリン』と昔の黒電話のような音が聞こえてきた。

「なんだ、この音？」

「ああ、僕の携帯の着信音です、ちょっと失礼」

そういつて、柴崎は電話に出た。つうかこいつマジで何者なんだ？

デアイ（後書き）

一人称が一番やりやすいかな

キケン

しばらく柴崎は深刻そうな顔をしてしゃべっていた。そして電話を切るなり、「緊急事態です」といいながら俺の手をつかんで強引に引っ張っていった。

俺はワケがわからず柴崎の手を振りほどいた。

「いきなりなにすんだよ！」

「だから緊急事態です、狼男は実は三人こつちの世界に来ていたんです、それで、仲間達がそれぞれ別のターゲットを狙ってたんですが、仲間の一人が始末するのに失敗したんです」

「それがなんで緊急事態なんだ？」

「ここまで言うてわからないですか！？ようは狼男がこの山の中にいるんですよ！」

そう言われてやっこの重大さが理解できた。だが、さっきの狼男を一発で仕留めえることができたのになんでそんなに慌てているんだ？

「お前なら狼男を倒すことなて簡単じゃないのか？さっきのヤツだつて一発で倒したじゃないか」

「あれは翔太さんを囷にして、アイツが油断していたから一発で仕留めることができたんです」

なに？俺を囷に？ということだ？

「俺を囿ってどういうことだ？」

「あつ」

柴崎は明らかにどうようしている。

「つまりお前は最初から俺を利用してたのか？」

「えーと、まあ、ちがうようで、ちがくないようで…」

俺はキレた。次の瞬間には大声で怒鳴っていた。今この山に狼男がいることを忘れ…

「ふざけるな！俺を囿にしてだど！？俺はもう少しで死ぬところだっただぞ！」

「落ち着いてください！この森の中には狼男がいるんですよ、そんな大声をだしたら、気づかれてしまいます、それに最も確実に獲物を仕留めるには、獲物が獲物を襲う瞬間が一番確実なんです」

柴崎 リクはさも当然のように言ってきた。

「もしあの時失敗していたら、俺は確実に喰われてただぞ！」

「その点でしたら、問題ありません、僕はあの時あなた近くにいてあなたが襲われそうになったら、すぐに攻撃できるよう準備していましたから」

こいつの言っている事は無茶苦茶だ、人間だれしも失敗はある、

もしあの時こいつが失敗していたら俺は確実に死んでいた、俺はこみ上げてくる怒りを拳に乗せて放とうとした瞬間、柴崎はいきなり俺を突き飛ばした。

後ろにあった木にぶつかりやり返そうと前を向いた。だが、目に入ったのは右目に白い眼帯をつけ、人当たりのよさそうな顔をした鬼畜ではなく、とにかくでかくて、黒くて、ケモノくさい、狼男だった。

俺はそれをみた瞬間体中の力が抜け、木に寄りかかったまま動けなくなった。柴崎はすでにどこからだしたのか、黒いリボルバーを抜いて狼男と対峙していた。

「翔太さん早く逃げて！」

俺は情けない事に足が震えていてまるで自分の足じゃないみたいにつまく動かせない。というか、なんでそんな物持つてるんですか？柴崎さん！

俺が恐怖で動けないことに気づいたのか柴崎は、狼男の注意を自分に向けさせようと、狼男に一発目の弾丸を放った！だが、狼男は驚異的な瞬発力で後ろに飛び上がりよけた、弾丸は俺の頭のちよつと上あたりに着弾！狼男は俺の後ろにある木を壁にして、一気に木を蹴り柴崎に向かってダイブ！柴崎は飛び込み前転の要領で狼男のダイブをかわし俺の目の前の転がってきた、そしてすぐに立ち上がって俺を脇に抱えるようにして、逃げた！

俺と柴崎の身長はたいして変わらない、気持ち俺の方が大きいぐらいだ。そんな俺を軽々と脇に抱えて山道を走る柴崎は只者ではない。

「なんで逃げなかったんですか！？」

柴崎は走りながら俺を怒った。そして急に立ち止まる柴崎

「まあいいです、とにかく今は逃げる事だけを考えないと…」

そういいながら、さっき撃った分の弾を補充した。

「とりあえず、翔太さんは僕から離れないでください。」

俺はまったく展開についていけずただ、立っているだけしかできない。

キケン（後書き）

リクは実はすごく腹黒いです。

シッパイ（前書き）

誤字などがありましたら、ご報告お願いします。

シッパイ

逃げてきたところからたいして離れてないの狼男は追ってこなかった。だが、柴崎は警戒を解かず常に銃を両手で構えいつでも撃てるようにしていた。

何でヤツは追ってこない？俺の時のように安心し、警戒を解くのを待っているのか？

「翔太さんエアーガンとか、使ったことありますか？」

唐突に柴崎は俺に質問してきた。エアーガンなら友達のをちよつと貸してもらった程度だが使ったことはある。

「ちよつとだけなら…」

「十分です」

柴崎は、銃を左手で構えたまま右手で腰から小さめのオートマチックの銃をとりだした。

「いいですか、狼男は伝説の通り銀に弱いですが、この銃には弾が二発しか入ってませんが、高純度の銀の弾が入ってます、自分の身は自分で守ってください」

柴崎はそう言い俺に銃を押し付けてきた、銃は小さいが重くずっしりとしている、この重さがこの銃の存在感を強めている気がする。おいおい…マジかよ、本物の銃だぞ、エアーガンと一緒にするなよ！というか、自分の身は自分ので守れて、どうすればいいんだよ！

「おい、柴崎どうす…」

「静かに、ヤツが近くにいます」

俺の言葉をさえぎり、静かで落ち着いた口調でいった。

俺はその言葉に驚き、警戒を強めた…

なにも起こらない…、柴崎は後ろから襲われないように近くの木に寄りかかっていた、俺も柴崎をマネて近くの木に寄りかかっていた。あたりに狼男の気配まったくなく、それどころか、虫の声さえも聞こえない。嵐の前の静けさ…

突然、柴崎が俺のほうに向き俺に向かって発砲した！

俺は驚き、横に飛んだ。

「なつなにすんだよ！」

柴崎に文句を言おうと見てみると、柴崎はさっきまで俺がいたところ、凝視していた。

まさかと思い俺は自分がさっきまでいた場所を見ると、手から血を流し、柴崎を憎憎しげに見つめる狼男がいた！

柴崎は俺を撃つたのではなく狼男を撃つたようだ。もし、あの時柴崎が気がついてくれなければ俺は今頃…いやIFの話をするのはやめよう。今はこの状況をどうにかしなければ、柴崎は狼男に銃口を向けたまま動かない。狼男もまた、撃たれた腕を押さえながら動かない。

俺は情けないことにさっきみたいに恐怖で足が動かない。だが、震えてはいるが手は動かせる！俺は銃を握り震える手を必死に押さえながら、狼男に銃口を向けた。狼男はじつと柴崎を見つめていて

こつちに気づいていない。標的との距離は十メートル程度、今しかない！

そして、俺は引き金を引いた。

予想以上の轟音とともに弾丸は放たれた！だが、弾丸は狼男にあたらず、狼男の横にある木に着弾！銃つてのは、よく狙わないと有効射程距離は八メートルぐらいしかないらしい。よく狙って八メートルだ、恐怖で手が震えている俺に当てられるはずがない。

終わった…俺は予想をはるかに超える衝撃で尻餅をついて、そのまま恐怖で動けない。狼男と目があつた。その瞬間狼男は俺に向かつて来た！

「翔太さん逃げて！」

柴崎が狼男の注意を自分に向けようと、一発目、二発目と立て続けに弾丸を放つ。だが、狼男はそれをいとも容易く避け俺に迫^{せま}ってくる。

俺は最後の悪あがきにもう一回撃とうと銃を構える。だが、も目の前に来ている狼男が左手を振り払うようにして、銃を弾き飛ばす。そして、狼男は右手の鋭い爪で俺の胸の中心を突き刺した！

その後すぐに、三回立て続けに響く轟音と獣の断末魔の声…

後はおおもわからぬ…胸のところが燃えてしまいそうなほど熱いだけだった。

シッパイ（後書き）

やっと、第一章がおわりました。
思ってたのより長くなりました。

ケイヤク（前書き）

誤字脱字などがありましたら、ご報告お願いします。

ケイヤク

気がつくと俺は川のほとりに立っていた。目の前には川中が三つかわなかの瀬に分かれていて、一つ一つ流れるスピードが違う、ちよつと変わった川があった。

ここはどこだ？なぜ俺はここにいます？俺は……確か家に帰る途中狼男に襲われて柴崎 リクとかいうのに助けられて、それからまた狼男に襲われて……そうだ、確か狼男に刺されて俺は……死んだんだ。

なんか、呆気ないな、死ぬってのも。

思えば俺の人生って不幸の連続だったなあ、小学六年生の時に親が離婚、母方のほうに引き取られて母さんの自家、月宮町の近くにある山（「オキツネ山」と地元の人に呼ばれ、恐れられている。なんでも、山の名前の通り狐のお化けがでるらしい、ちなみに俺は一度も会ったことはない）に引っ越してきた。

それから、母さんは俺を養うために働いた。たびたび出張で何日も帰ってこない日もあった

この山は母さんの親父、俺の祖父の山だ。引っ越してきた時は、親の離婚のことと周りになじめず引きこもりになった。

母さんは俺を養うために働いた。たびたび出張で何日も帰ってこない日もあった。

中学に入ってからには心機一転頑張ろうとしたが、オキツネ山にすんでいるからという理由でいじめられた。

それでも俺はめげずに学校に通い三年になるころには、いじめはなくなっていた。だが、三年になってすぐに祖父が他界、後を追うようにして祖母も逝ってしまった。

俺は祖父や祖母と親しかった、死んでしまったことにショックを受け、しばらくは立ち直れなかったほどだ。

それから、母さんは仕事が忙しくなり、最近はめったに帰ってこ

ない。

そして、高校に入って初めての夏にこれだ。不幸と言わずしてな
んと言う。

「俺は……もしかしたら、死んでよかったのかなあ」

「おいおい、十五、六のガキがなにネガティブ発言してんだ」

突然、どこからか声がした。周りを見渡すと川上のほうに大きな
岩があり、その上によくマンガとかで魔法使いが着るような黒いロ
ーブを着たスカイブルーの髪をした男が座っていた。いや、女か
？ものすごくきれいな顔してる。さらによく見ると瞳まで綺麗なス
カイブルーだ。

そのスカイブルーの瞳をみていると、吸い込まれそうでちよつと
怖いぐらいだ。

「あんたは誰だ？」

「俺か？俺は大神 牙だ。柴崎 リクの仲間、というよりご主人
様かな？」

今柴崎 リクの仲間って言ったぞコイツ！今はあえてご主人様と
いう言葉は聞こえなかったことにしよう…

「あんた、柴崎を知ってるのか！？」

「だから、言っただろ柴崎 リクのご主人様だって」

いや、ご主人様ってこいつ変態か！？俺はやっぱり、ご主人様と
いう言葉を聞こえなかったことにはできなかった。

「まあ、今そんなことはどうでもいい、俺はリクに頼まれてお前を生き返らせにきた」

俺は大神 牙の言葉に驚いた。

「俺は生き返れるのか!？」

「ああ、お前は厳密には死にきつてないからな、そこでだ、お前を生き返すことは意外と簡単だ、しかも、人外の力が手に入るおまけ付でだ」

大神 牙は岩から飛び降り俺に近づいてくる。手を伸ばせばお互いに触れる事のできる距離まで来て止まる。

「もちろん、条件付だけどね」

大神 牙の言っている事がまったくわからない。最初は生き返れることが、ただうれしかった。だが、人外の力とか、条件だとか、このまま素直に生き返らせてもらうと、自分がもっと不幸なめにあいそうな単語だ。

「どうだい、生き返りたいか？それともこのまま死にたいか？」

大神 牙は俺をせかす。

「ちよつと待ってくれ！人外の力とか、条件とかいったい何なんだ？説明してくれよ！」

「ああ、そうだな説明しないといけなかったな、すまん、すまん、

まず、人外の力つうのは人によって色々だ、どうなるかもわからない、だから説明できない」

それじゃあ、なにもわからないだろ！俺は声に出さずに突っ込んだ。一応これから生き返らせてくれる人だ、下手な突っ込みはよくない。

「次に条件についてだが、これは簡単だ、俺の下僕になれ」

俺は絶句した。たぶんこのときの俺の顔は口を半開きにしてだらう。

「下僕って言い方はよくないな、うーん、僕？^{しもべ}召し使い？奴隷？使い魔？とにかく俺のゆうことに聞けばいいだけだ、ただそれだけだ」

結局わかったのは、大神 牙は変態で、何されるかわからないということだけだった。

「おい、早く決めてくれないか、そろそろお前の脳が死に始めるぞ、脳が死んだら、生き返えすことができなくなる」

「俺は……」

俺は生き返りたい、だが、不安だ。生き返らせてもらうことによつて、なにさせられるのか？人外の力とはなんのか？色々不安だ。だけど、それでも、俺は生き返りたい。俺は少し間を空け答えた。

「俺は生き返りたい」

大神 牙はニヤリとわらった。

「よし、契約成立だ」

「よろしくな」といいながら、右手で握手を求めてきた。俺は迷わずその手をとった。

ケイヤク（後書き）

ものすごく読みづらくてすいません！

ヘンシン

爽やかな朝の日差しで俺は覚醒した。頭がボーっとしている。こは、たぶんベットの上だろう。ちゃんと薄い布団までかけられている。だが、誰のベットだ、これ？

最近起きるたびに自分がどこにいるのかわからないことが多い気がする。とりあえず、俺は周りを確認するために起き上がる。しかし、体が思うように動かせない。

俺は仕方なく頭だけを動かし辺りを見回す。

目に入ったの使い古された机、マンガ本しかならんでいない本棚、全身を映すことのできる大きな鏡、全て見慣れたものだった。それもそのはず、ここは俺の部屋だからだ。

なんで俺はここにいるんだ？昨日は狼男に襲われて、山の中で……まさか、昨日の事はすべて悪い夢だったのか？そうだったら、納得がいく、この世界に狼男なんているはずがない！よって昨日の事はすべて俺の夢、妄想だ。そうに違いない。俺は無理やり自分に納得させた。

おっと、もお六時だ。部活が始まるのが9時だから……そろそろ支度しないと、部活に遅れる。俺の家は山の頂上にあるから学校まで最低一時間はかかる。

俺は起き上がろうと、腹筋に力を入れた。しかし、起き上がれなかった。

体が思うように動かせず布団もどけられない。しばらく手足をジタバタさせ、やっと布団をどかすことに成功した。

昨日部活でどっか痛めたかな。確認しようとまず右手から見る。だが、そこには俺の手はなかった。いや、正確には手はある、しかし、その手は人間の手ではなかった。

俺の手は、黄色い獣毛にびっしりとおおわれた、物を持つには不利な、四足獣の前足のようになっていたのだ！同じように左手もだまさかと思い俺は急いで鏡の前に向かった。といっても、体が思うように動かず這うようにだが……

鏡に映ったのはやはり自分の姿ではなく、今まで見たことのないような獣だった。その姿はどことなく狐に似ていて細身だが、体高八十センチもある。しかも尻尾が二つに分かれている。胸のところだけ白いが全身黄色い獣毛におおわれて、ところどころ黒い横じまがはしっている——某アニメの電気ネズミのような柄だ。^{から}

一見するとその姿はとても可愛らしく、抱きしめてみたくなる。自分の体じゃなければの話だが……

「なっ、なっ、なんじゃこりゃああ！！！」

俺は力の限り叫んだ。たぶん、俺の声は山全体に響きわたっただろう

「五月蠅い！朝からなに叫んでるの！！」

怒声と共に部屋のドアが勢いよく開かれた。

しまった！隣の部屋には母さんがいるんだった！母さんにこの姿を見られたら俺は……

俺はとっさに隠れようとしたがもお遅い、すでにドアは開かれている。

俺は覚悟を決め、ドアの方を見る。しかし、そこには母さんではなく、左目に白い眼帯をした……美しい少女が立っていた。彼女の髪は肩にかかるぐらいの長さで、真っ黒だ。しかし、その黒が彼女の白い肌をさらに引き立てる。彼女の顔は左目に眼帯こそしているものの、まるで、巧妙に作られた人形のような。

彼女は不機嫌なのか、眠いのか右目を細めている。が、それがまた可愛い。俺は今までこんな美しい少女に出会ったことがない。このとき俺は生まれて初めて一目惚れをしたのだと思う……

ヘンシン（後書き）

自分の文章力では美少女ってものを表現するにはまだ難しかったです……

フタゴ

我が家の居間に右目に眼帯をした少年と、左目に眼帯をした美少女、そして、獣の姿をした俺がいる。

少年と少女は一緒に我が家のソファーに腰をかけている。俺も彼らが座っているソファーとは、反対のソファーにお座りしている。この部屋は今、沈黙が支配している。誰も声を出さずただ黙っている。

俺は少年、柴崎 リクの言葉に落ち込んでいる。いや、絶望している。あまりに残酷すぎる現実には俺は絶望したのだ。

俺は顔を下に向け柴崎 リクを見ないようにしている。

「翔太さん…… なにもそこまで落ち込むことはないでしょお。」

柴崎 リクは最低の野郎だ。デリカシーの欠片もない。

柴崎 リクという人間を表面的に表すのなら、「優しそう」という言葉が最適だろう。

いつも、ニコニコ笑っていて、なにか頼んだら快く引き受けてくれる。そんな感じた。

だが、これはあくまでも表面的にだ。実際には「優しそう」などという言葉は似合わない。

コイツには「鬼畜」という言葉がお似合いだろう。

しかし、これは狼男を誘い出すためだけに、罠に使われた俺だからこそ云える事だ。

「翔太さん、これから色々話をしないといけないのですから、いい加減顔を上げてください。ただ、妹の紹介をただけでしょう」

そお、俺はただ柴崎 アカネの紹介を聞いたただけだ。しかし、俺

にとっては大問題だ！

柴崎の隣に座る美少女、長く艶やか黒髪。透き通るような白い肌。細い輪郭。すっきりとした顎。背筋がピンと伸びて姿勢がよいせいだろつか、さほどの膨らみでもない胸元も魅力的に見える曲線！まさに完璧、文句のつけようがない美少女だ。

彼女を形容するのに「美」という単語は必須だ。

それが……なんで、あんな鬼畜野郎の実の妹なんだ！しかも双子だと！ふざけるな、こんな設定ぶち壊してやる！

俺は態度一変しソファアの上で暴れた。

そうしないと、なんだかやるせない。

「お兄ちゃん、翔太さんになんか変なこと云った？」

うわああ！アカネちゃんそんな鬼畜のことをお兄ちゃんって云うなあ！！

「いいえ、アカネだって聞いていたでしょう？僕はただ「僕の双子の妹 アカネです」と紹介しただけです」

「そうだよね……。ねえ、翔太さんお願いだから暴れるのをやめて」

「わかった」

俺はすぐさま暴れるのをやめた。

だって、アカネちゃんのお願いだから……

「それで、話ってなんだ」

「……その前に、僕から一言あります」

そう云い、柴崎はソファから立ち上がる。

内緒話するように、俺のピンツと尖った耳に口を寄せる。

「妹に、惚れたら殺しますよ」

柴崎の言葉には本物の殺意がこもっていたと思う

フタゴ（後書き）

リク君は重度のシスコンです。ただ、それだけが云いたい。

ご意見、ご感想、または誤字脱字とつがありましたら、ご報告ください。

スガタ（前書き）

誤字脱字とつがありましたら、ご報告お願いします。

スガタ

俺はあの後、恐怖でリクの顔をまともに見ることができなかった。あれは、本当に怖かった。狼男のときは、また別の恐怖。

狼男のときは心臓バクバクで、自分がなに考えてるかさえわからない。そんな感じだった。

だが、リクのは体の芯から凍らせていくような恐怖だ。

俺は、リクの言葉を聞いた後、恐怖で全身の毛が総毛立った。

だが、おかげでアカネに背中を撫でてもらったのが、嬉しかったけど……

「ところで、母さんの姿が見えないんだけど」

「いまさらな発言ですね」

確かにその通りだ。

「まあ、翔太さんは二日も寝込んでたから仕方ないよ」

アカネが笑いながら云う。

俺は二日も寝込んでたのか。二日も部活を休んでしまったが、仕方ないか。

「とりあえず、母さんはどうしたんだ？」

「私達が翔太さんを担ぎこんで着た時には、翔太さんのお母さんはいなかったよ」

「変わりにこれがあったけど」と云いながら、ポケットから小さ

なメモ用紙を取り出す。

メモ用紙を床に置く。内容は、母さんが夏休みの間留守にするというものだった。

ちよつと都合が良すぎる気もするが、まあいいだろう。

「翔太さんのお母さんはお忙しいようですね。丁度いいです」

リクが横からメモ用紙を覗いてくる。

まったく、失礼なヤツだ。

だが、丁度いいの確かだ。

「さて、そろそろ本題に入りましょうか」

リクがパンつと手をたたく。

「まず、翔太さんのことです。翔太さんのその姿は『雷帝』と呼ばれ、雷を自在に操る妖狐の姿です」

雷を自在に操るか…… かつこいいかも。

「そして、人間の姿になる、方法ですが……」

ん？人間の姿に『なる』だつて？戻るじゃないのか？

「おい、今人間の姿に『なる』って云つたよな？戻るじゃないのか？」

「……残念ですが、人間だった『如月 翔太』は死にました。今は、その姿があなたにとって本来の姿です。でも、人間の姿になる事はできます。僕達はこれを化けると云っています。そして、化けるに

は新月のときにしかできません」

太陽と月には狼男や翔太さんのような人外の本性を表す力があります。

その力はとても強力で、曇りの日や雨の日などとは関係なく効力があります。

月の方は特に強力で、少しでも出ていればまず化ける事は無理です。

狼男は満月を見ると変身するという話がいい例です。

月の力が最高になる満月のときは強制的に本性——つまり本来の姿になってしまいます。

これは、狼男だけではなく化けるている者、全てにいえることなのです。

だから、太陽と月が同時に隠れるとき、新月のときにしか化けることができないのです。

そして 月というのは、大体15日ごとに満月と新月がやってきます。

新月の日には人間の姿になっても、十五日後には満月の日が来て獣の姿になってしまいます。

つまり、人外は一ヶ月のうちに十五日間しか人間の姿になれないという事です。

俺はリクの言葉を黙って聞いていた。

とういうよりも、なにも云えなかった。

俺はこのとき自分が本当に人外になってしまったことを、思い知らされた。

これじゃあ、まともに学校も行けないし、なにより家にいられない。

せめて、高校は卒業したかった。

俺はこの先のことを考えるとお先真つ暗だ。

「しかし、翔太さんは人外でも、ただの人外ではありません。僕らと同じ牙の使い魔です。牙なら満月のときでも、人間の姿でいられるようにしてくれます」

「本当か！」

真っ暗闇に一筋の光が見えたかも知れない。

「ただし、牙が条件付だと云ってましたが」

さっきのは気のせいだったようだ。

スガタ（後書き）

ちよつと、展開が速すぎですかねえ

マヨイ（前書き）

お久しぶりです。七夕です。
一年以上放置してしまい、すいませんでした！

マヨイ

辺りは闇一色

夜空には無数の星達が輝きそんな中、細長い月が、ほんの少しだけ足元を照らしてくれる。

新月まで後二日……

リクが云うには、この世界とは別にもう一つ世界がある。その世界には人間はいない、代わりに人の姿をした獣、獣人がいる。獣人たちの世界はこっちの世界のように文明が発達していない。よって、車や、テレビや、携帯電話などの便利なものはない、がそのかわりに、向こうの世界には魔法（リクは魔術と云ったが、同じものだろう）がある。

グリムと呼ばれる生物に馬車を引かせたり、魔法で遠くの人と話したり、さらに特殊な鏡でテレビのようなこともできるらしい。

さらには魔物モンスターまでいる。まさに剣と魔法の世界、ファンタジーの世界だ。俺がこんな姿じゃなければとうてい信じられない話だ。このことを知っているのは、こっちの世界では人外たちだけのようだ。向こうの世界でも一部の獣人たちだけしか知らない。そんな世界からきたのが今回の三人の狼男たちだ。これまた、リクが云うにはこちらの世界と向こうの世界をつなぐゲートがある。このゲートはラダムで聖域と呼ばれるような神聖な場所に出現する。しかし、ゲートが出現したとしても、ゲートが『開く』とは限らないらしい。彼らはこのゲートを『偶然』見つけて、しかもそのとき『偶然』ゲートが開いていて、国外逃亡ならぬ世界外逃亡？をしてきたらしい。

この狼男のうち二人はこないだリクが殺した。そして、最後の一人は殺さずに生け捕りにすることが牙の条件だ。なんとムチャクチャな条件だろう。

リクが云うには、それはとても難しいことだそうだ。

獣人たちの力は種族にもよるが、人間よりもはるかに強い、ましてや人狼族は獣人の中でもかなり上位に位置する。

そんなヤツを生け捕りにできる訳がない。

しかし、しなければならぬ。

後2日以内に狼男を捕まえないと、俺はこの姿のままだ。それだけは勘弁してほしい。

そして、俺とリクは狼男を捕まえるために、暗い森を歩いている。俺は、地面に鼻を近づけて、そこに残っている狼男の臭いを嗅ぐ。この姿になったおかげで、嗅覚はもちろん視力、聴覚、触覚、味覚まで人間の時よりはるかに鋭くなった。

さらに第六感とでも云うのか、霊感とでも云うのか明らかに普通の人には見えない『モノ』が見えるようにもなった。

頭から血を流している中年男性や、人魂や、妖精みたいな『モノ』だ。

正直かなり怖い、彼らの虚ろな眼を見ると寒気が走る。逆に、妖精や精霊はとても美しかった。

「おい、リク！臭いなんか全然しないぞ！」

「そんなはずは、ありません、もう少し頑張ってください。時間がないんです！」

そんな事言われても……

オレは必死に狼男の臭いを探した。

しかし、臭いはまったくない。

「おかしいですね。翔太さんの嗅覚は犬並みに鋭くなっているは

ずなのに……」

「これから、どうすんだよ。新月まで後二日しかないんだぜ！」

「わかってます。もしかしたら、この山にはもお、狼男はいないのかもしれないね」

「それは……つまり、狼男は町に行つたかもしれないってことか？」

「その通りです」

わかつてはいたが、言葉にすると実感が沸きそして焦りが出てきた。これはまずい。非常にまずい。あんなバケモンが見つければ大騒ぎだ。

それに並の人間が狼男にかなうわけもなく、即狼男の餌になるだけだ。

「もちろん町にいくよな？」

「もちろんです。しかし、今日はやめておきましょう」

「なんでだよ！夜はまだ長い、今町に行つて探す時間はたっぷりあるぞ！それに早くしないと、町の人が襲われるかもしれないだぞ！」

「たしかにそうですが、焦って策も無しに突っ込んで行ったら確実に殺されます。今日は家に戻つて、町の構造について教えてくだ

さい。明日で、すべてを終わらせましょう」

「……そうだな。焦っても仕方ないか」

そして、俺たちは家に戻る事にした。

~~~~~

自宅

「さて、どうしますか？」

リクは、ため息と共に言った。

「どうするも、何も明日狼男を見つけて生け捕りにするしかない  
だろ」

「簡単に言いますが、狼男はそんな甘い相手ではありません。ち  
ゃんと作戦を練って行かないと、即全滅です」

「じゃあ、どうすれば良いんだよ！」

「まず、戦う場所を探しましょう。条件は、障害物がなく広い場  
所です」

「そういう所だと人に見られるかも知れないぞ？」

「それは大丈夫です。人払いの魔法がありますから」

魔法とは便利なものだなと改めて感心した。そうすればかなり戦える場所は多くなる。この町はド田舎だ。『障害物がなくて広い場所』なんて腐るほどある。

「ここなんて、どうだ？結構広いし何にもないぞ」

「確かにいいかも、知れませんがこの山から遠すぎます。この辺りまで逃げたとは考えにくいですね」

「そうか……、じゃあ、ここは？ここなら近いぞ」

「ここは田んぼですか？足場が悪いです。自分より早く動ける敵と戦うときは、なるべく足場がいい所が望ましいです」

「じゃあ、ここは？」

「広すぎです。これだけ広いと逃げられる可能性があります」

「ああ、もお！さつきから話が全然すまねえじゃんか！いったい何処ならいいんだよ！」

「ですから、『障害物がなく広い場所』って言っているじゃないですか！」

だめだ……、話がまとまらない。ここもだめ、そこもだめ、これじゃあ、戦う場所なんてないじゃないか。この理屈屋に一発噛み付いてやるつか。

「ここならいいんじゃない？」

俺が噛み付く準備をしている時、アカネがボソつと言った。

「確かにここならいいですね。結界も張りやすそうですし」

「いや、だけどそこは……」

そこは確かに『障害物がなく広い場所』だ。遠すぎず、足場もよく、広すぎない。最適な場所だ。だけどそこは……

「駄目だ」

「なぜです？ここが最も戦いやすい場所だと思いますよ」

「だって、そこは……学校だぜ？」

## ワナ（前書き）

遅くてごめんなさい！  
遅くてごめんなさい！

ワナ

時は夜9時頃、真夏なのになぜかうすら寒く感じる夜の学校。そんな中、俺とリクは狼男を捕まえるワナを作っている。

「よいつしょっ、どこらっしょっ」と

なぜか爺臭いかけ声と共に魔方陣を書いているリク

「それで、狼男が捕まえられるのか？」

「もちろんです。これは捕縛用の魔方陣で、ここに入った者を雁<sup>んじがら</sup>字<sup>が</sup>搦めにします」

既に入払いの魔法を張り、後はこの魔方陣だけだ。

魔方陣は一人が納まるぐらいの大きさと、それを五つ配置してある。

その中の一つにでも狼男を入れたら俺たちの勝ちってことだ。そして、一番の問題は……

「よしっと、後はアカネがここに狼男をおびき寄せただけですね」

「それなんだけど……本当に大丈夫なのか？」

そお、狼男をここにおびき寄せることだ。

しかも、その役目をアカネちゃんがやっている。

「大丈夫ですよ。アカネはそんなに弱くないし、むしろ殺してしまいかも知れません。そっちの方が心配ですよ」

真顔でそんなこと言われても……

「それよりも、翔太さんの方が心配です。戦闘中は守れませんよ」

「うつ……俺は、たぶん大丈夫だ」

俺はこの三日間、狼男の搜索だけをしていただけではないのだ。リクに俺の『力』についてみっちり教えられたし、ある程度なら使える用になった。

「本当ですか？ 僕の予想では正面切って戦えば一分もって御の字、下手をすれば瞬殺です」

やっぱり駄目みたいだ……

「じゃあ、どうすればいいんだよ？」

「うゝん、ただいるだけでは邪魔ですし……、生贄おとりはどうでしょうか？」

「このくそ野郎！ また俺をおとりに使う気か！？ しかし、今回は漢字……もとい感じが違うぞ！」

「そんな怒らないでください。ほんの冗談ですか」

いや、今の絶対マジだった！ 顔がマジだった！

「そろそろ、アカネが来そうですね。作戦のおさらいをしましよ  
う」

「まず狼男がこの敷地内に入った時点から作戦スタート  
敵をグランドの中央に誘導します」

「それから、三人で連携して五つの円のどれかに入れれば俺たちの勝ちだろ？」

「その通りです。連携はアカネが前衛、僕は中距離からアカネをサポート……」

「中央で遠距離からサポート、危なくなったら逃げる」

「完璧ですね」

しかし、我ながらみつともない作戦だ。

「危なくなったら逃げるだなんて、みつともないしなによりダサイ。ここはアカネちゃんにかっこいい所をみせるか……」

「ちなみにみつともないとか、ダサイとかアカネにいいところ魅せるだとか考えているなら死にますよ。狼男は強敵です。危険を感じたら即逃げる、

これぐらいの考えがなければ死にます。それを頭に入れておいてください」

こいつは、エスパーか……

『ジリリン、ジリリン』

センスのない着信音  
作戦開始の合図だ。

「来ました、さて『狼男捕獲大作戦』始めますか」

なんと間の抜けた作戦名だ。

しかし、気を引き締めなければ俺が死ね。

確認する。

俺は校庭のど真ん中にいる。

リクは俺の前にいる。

ポジションは完璧。

俺はいつでも動けるように、獣の四足に力をいれる。

集中し、ピンと立った獣の耳で音を聞く。

神経を尖らして、獣の鼻で臭いを嗅ぎ分ける。

目を凝らし、獣の視力で夜を見つめる。

全身の獣毛で、大気の流れを感じる。

「翔太さん上です！」

見上げる。

そこには黒い固まりが見える。

俺はとつさに後ろに跳んだ。

数瞬して俺がいた所に黒い固まりが落ちてきた。

避けてなかったら、死んでた……

「大丈夫？」

優しい声が聞こえる。

横を向くとアカネがいた。

彼女は異様だった、何が異様だった？

それは小柄な女の子がバカでかい日本刀持ってたなら、異様ですよ  
奥さん。

まるで、それはマンガやアニメのような光景だった。

「ぼうつとしないで翔太さん」

はっと我にかえる。

「今は目の前に敵に集中して」

そして、彼女は駆けていった。

銃声が聞こえる、リクも動き始めた。

俺は一度頭を振ってから……

「よし！」

気合い一発！

狼男捕獲大作戦をはじめよう。

## ハツドウ（前書き）

久しぶりの投稿です。

## ハツドウ

月がない夜は暗く、しかし夜空には星々が輝き人外になった俺には十分な明るさで、

ここ月宮高校のグラウンドで行われている壮絶バトルを映し出していた。

アカネはその可憐な姿に似合わない身の丈ぐらいある刀を大胆に、しかし無駄なく振り回している。

リクは、アカネの武器の性質上どうしても生まれてしまう、隙をゴム弾で精確に狼男の反撃を阻止する。

俺は見ている事しか出来なかった。

正直俺は舐めていた。人外になってからは身体能力は飛躍的に上がった。

これなら狼男のスピードにもついて行けると思っていた。

とんだ高慢だ。俺には狼男の姿ましてやリクとアカネの姿すらまともに追えていない。

「どうすりゃいいんだよ……」

俺がこの三日間で出来るようになったのは、局地的に電気を発生させるぐらいだ。

しかも、静電気よりちょっと痛いぐらいのレベル。

それで、どうしろって言っただよ！

「アカネ！ちょっと任せます！」

「リク！何してんだよ！早くアカネちゃんのサポートしろよ！」

「それはこっちの台詞です！この作戦で一番重要なのは翔太さん

のサポートですよ!？」

俺のサポート? そんな物が無くても二人でなんとかなりそうじゃないか。

「説明してる暇はありません。まあ、なんでもいいから静電気撃ちまくちゃってください」

「そうすると、お前らに当たるかもしれないだろ！」

「大丈夫です。翔太さんを信じます。でわ」

かつこいい台詞と共にリクはアカネのサポートに戻って行った。撃ちまくるって……

「ああ! もおどうなっても知らん！」

まあ、俺は怒った。アカネちゃんに当たるのは忍びないがリクに当たれば万歳だ。狼男に当たれば万々歳だ!

俺は狼男を睨む。狼男を目で追いながら、周囲に『何か』が集まる様なイメージをする。それが集まりきって弾ける

バチッ!!

はじける音と狼男の悲鳴。

マジで当たったの!?

「ハアアアア！」

狼男がひるんでいる隙に、アカネが峰<sup>みね</sup>の部分で狼男を魔方陣に押

し込む。

狼男が入った瞬間円は輝き、光の鎖が狼男を拘束していく。

「捕まえた！」

「まだです！」

リクが叫ぶ。

それに、呼応してか狼男も叫ぶ。

狼男が鎖を引っ張って無理矢理引き千切ろうとしている。

「おい、リク！あんなんで鎖が千切れるのか！？」

「分かりません！しかし、あれはまずいです！」

「お兄ちゃん！翔太さん！来るよ！」

鎖にはすでにヒビが入っている。

ガルラアアア！！

狼男の咆哮で鎖が飛び散った。

魔方阵が壊れて軽い爆発が起こり砂塵が舞い、狼男が見えなくなる。

リクとアカネはすぐに俺の所に来て、三人が互いに背中を合わせるように立つ。

「……………」

「……………」

「……」

静寂が流れた。

俺達は固まったように動かない。

というよりも動けない。砂煙で狼男を完全に見失った。

どこから来るか分からない。

どのくらい時間が過ぎただろうか。多分たいした時間は過ぎていない。

せいぜい30秒くらいだろう。マンガとかである、一瞬がとても長く感じるっていうやつか。

「これからどうするの？」

アカネが静寂を破る。

「持久戦です。狼男の体力を魔方阵を壊せないくらいに削って捕縛します」

「それってどのくらいかかるんだよ？」

「さあ、もしかしたら夜が明けてしまうかもしれないですね」

「こっちが体力負けしたら？」

答えなんてわかっていたけど、聞かずにはいられなかった。

「全滅ですね」

やっぱしそうなるよね……。

その時だ。また爆発音がした。

「な、なんだ!?!」

ドカーン!

まただ!

「なんの音だよ、リク!」

「これは……多分魔方阵が破壊されている音ですね」

「魔方阵が破壊されているって、そんな事できるのかよ!」

しかも、こいつなんでこんなに冷静でいられるんだ?

「出来ますよ。用は魔方阵の中に入らなければいいんですから、外から陣を崩せばいいだけです。ほら、あんな感じで」

リクが指差す方を向いてみると、狼男が傲慢の爪で円を破壊していた。

狼男は、爪を地面につけ、腕を引きずるようにして駆けている。

魔方阵は、狼男の爪で、線を消され、一瞬光ったと思えば、はじけて爆散している。

狼男は、その姿勢まま次の魔方阵へと駆ける。

1つ……。

さっきと、同じ音がする。

2つ……。

地を揺るがす爆音。

地面をえぐる音も聞こえなくなった。

リクが用意していた魔方陣は、全部で5つ。

「リク、どうするんだ？あれ、全部壊されちゃったぞ！」

「……予想外です。これほど強いとは」

リクは、眉間にしわをよせてちょっとだけ困ったような顔している。

「なんか、作戦あんのか？」

「あります」

リクが即答してきた。しかも、自信満々の顔でだ。  
さすがはリク！伊達に腹黒くないぜ！

「しかし、問題が……」

なに！？

「問題って何なんだ！？」

「……翔太さんは、僕のことを信じてくれますか？」

この状況で何言ってたんだコイツは！？

「信じるもなにも、俺はお前に頼るしかないだろう！」

「わかりました。翔太さんはここでアカネのサポートをしてください。アカネは翔太さんと時間稼ぎを」

「わかったわ」

俺達はだいたい校庭の真ん中、さっき壊されていた魔方陣囲まれている。

狼男は、砂煙でいまだどこにいるかわからない。

「お前はどうするんだ!？」

「僕は魔法陣の修復をします」

俺にアカネちゃんのサポートがつとまるのか? いや、やるしかない。今の状況で弱音を吐いている場合じゃない!

「わかった」

覚悟を決め、再び臨戦態勢をととのえる。

差な砂煙が晴れ狼男が姿を表す。魔方陣を素手で壊したせいかな、左手がボロボロになっている。

「それでは、各自位置に着いて……よい、ドン！」

リクの間抜けなかけ声でつまずきそうになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2078c/>

---

翔る狐は何処に行く

2010年10月9日14時26分発行